



5/29 に打った蕎麦



蕎麦の花

退職後に取得した資格は、「蕎麦打ち」です。

蕎麦打ちを十数回練習し、約 1kg の蕎麦を打ち、その出来や様子を審査員が判定するという試験に合格して、初段になった。その後、師匠から、次は 2 段で 100 回、3 段で 1000 回練習と言われ、昇段は諦め、美味しい蕎麦を打つことを目標に、月 1 回程度練習を続けている。

蕎麦を打ちながら、蕎麦に関連する記事が聖書にあるか考えていた。見つからななかつたが、天草の昔話に以下のようなおはなしがあった。 ([https://minwanoheya.jp/area/kumamoto\\_005/](https://minwanoheya.jp/area/kumamoto_005/)より引用)

ずっとむかし。九州の天草の島々には、キリスト教を信じる沢山の人がおった。ところが豊臣秀吉や徳川家康は、キリスト教は外国からきたよくない宗教だから信じてはいかんという、道理に合わないおふれを出した。キリスト様を信じる人達は、役人につかまると、火あぶりになったり、水ぜめになったり、あげくの果ては次々と殺されてしまうた。

ある秋の日のこと、天草の百姓（ひゃくしょう）、信吉（しんきち）夫婦が畑にソバの種ををまいていると、タッタッタッタッタと、何人かの人間が走ってきた。背の高い、茶色い髪の外国人、つまり異人が二人、そのあとには、二～三人の百姓がぴったりとついてる。そして、信吉夫婦に近づくと、

「助けてください。役人に追われ、つかまると殺されるとです。」「オネガイデス。コロサレマス。カミサマ、アナタガタヲ、キットマモリマス。」

と、逃げてきた百姓と異人が口ぐちにいうた。

「でも、あんたたちは罰人（ざいにん）じゃなかかね。罰人じゃけん、役人に追われとるんじゃろ。そんなら、助けるわけにはいかんとね。」

「罰人というても、何も悪いことはしておらん。ただ、天の神さま、キリスト様をお祈りしとるだけじゃとね」

「そうか。キリシタンか。それなら、早う逃げなされ。この先の崖の下に岩穴があるよって、あそこならだれにも見つからんとね。」

「ありがたい。神様はきっとお前さんたちを守ってくださるとね。役人がやってきたら、ソバの種をまいているときに崖の方へ逃げていきよったと、本当のことをいうてくれ。」

異人とつれの百姓は急いで崖の方へ逃げていった。すると、不思議なことに今まいたばかりのソバが次々と芽を出し、白い花をつけ、一面まっしろなソバ畑となった。まもなく、追手の役人が大勢やってきた。

「おい百姓、今ここに異人達が逃げてこなかったか。キリシタンを隠すと、お前達もただではすまんぞ。」

「はい、異人達はここを通過して崖の方へいきました。けれどもそれは、このソバの種をまいているときです。」

「何、このソバの種をまいているとき。ソバはもう白い花をつけているではないか」

「確かにソバの種をまいているときに異人達が通りました」

「そうか、それならずと前のことだ。しかたがない、みんなここにはおらん。引き返せー。」

追手の役人はきた道をもどっていった。すると、今まで一面に咲いていた白いソバの花が急にしぼんで、もとのな一んにもない畑になった。

信吉夫婦は、きっと天の神様が助けてくれたに違いないとね。天の神様は、どうにもならんときには、お救い下さるんだ と、両手を胸にあてて、いつまでもいつまでもお祈りしたと。

このことは、人から人、村から村へと伝わり、天の神様の不思議な力に感動した人達は、そのあともずっと、かくれてキリスト様を信じていたそうなの。

ところでダジャレになるが、「蕎麦」は「そば」「そばにいる」で、「そばにいる」は近くに存在するさま、ある人のかたわらに寄り添っているさまなどを意味する表現である。今年5月28日がペンテコステ、聖霊降臨節。最初のペンテコステで、使徒ペテロはダビデ王の言葉を引用して説教した。

ダビデは、この方について次のように言っています。『私はいつも、主を前にしています。主が私の右におられるので、私は揺るがされることはありません。それゆえ、私の心は喜び、私の舌は喜びにあふれます。私の身も、望みの中に住まいます。(使徒の働き 2章 25～26節)

主イエスがそば(右)にいて、寄り添ってくださる時、揺るがされることなく、喜びにあふれると。今週もイエスのそばを歩みたいと思います。